新訳グリム童話二編

―ＫＨＭ一九三、一九七―

グリム兄弟・編
梅内幸信・訳

『太鼓たたき』（ＫＨＭ一九三）

ある夕暮れのこと、若い太鼓たたきが、たった一人っきりで、野原を歩いておりました。湖のほとりにやってくると、岸辺に白い亜麻布が三枚置いてあるのが目にとまりました。「なんてきれいな亜麻布なんだろう」と、若者は言って、そのうちの一枚をポケットに入れました。家に帰ると若者は、拾ったもののことは、もはや頭になく、ベッドに入りました。ちょうど太鼓たたきが眠りに落ちようとしたとき、だれかが自分の名前を呼んでいるような気がしました。若者が耳をすますと、「太鼓たたきさん、太鼓たたきさん、起きてくださいな」と呼びかける、かすかな声が聞きとれました。真っ暗闇でしたので、若者は、人の姿を見ることはできませんでしたが、それでも、人かげらしきものがベッドの前であがったり、さがったりして、ただよっているように思われました。「なにか用があるのかい？」と、若者はたずねました。「わ

たしのシャツを返してちょうだいな」と、その声が答えました、「きのうの夕方、あなたが湖のほとりで取って行ったシャツよ。」「返してあげるよ」と、太鼓たたきは言いました、「あんたが何者なのかを教えてくれたらね。」「ほんとうは」と、その声は答えました、「わたしは、権勢のある王の娘なのです。でも、魔女の魔法にかけられて、ガラスの山に封じこめられているのです。毎日わたしは、二人のお姉さんたちといっしょに、湖で水浴びしなければなりません。でも、シャツがなくては、飛び帰れないのです。お姉さんたちは、飛びさってしまったのに、わたしは取り残されてしまいました。お願いですから、わたしのシャツを返してくださいな。」「かわいそうに、安心しなよ」と、太鼓たたきは言いました、「喜んで返してあげるから。」太鼓たたきは、ポケットから亜麻布を取りだすと、それを暗闇の中でお姫さまに手わたしました。お姫さまは、亜麻布を急いでつかむと、そのまま飛びさろうとしました。「ちょっと待ちなよ」と、太鼓たたきは言いました、「あんたを助けてあげられるかもしれんから。」「あなたがわたしを助けるには、ガラスの山を登ってきて、わたしを魔女の魔法から解いてくれなければなりません。でも、あなたはガラスの山にはこれないでしょうし、たとえすぐ近くまできたとしましても、山の上にはこれないでしょう。」「おいらがその気になれば、なんでもできるさ」と、太鼓たたきは言いました、「あんたが気の毒でならないし、それに、おいらにはこわいものなんか、なんにもないんだから。けど、ガラスの山へ行く道が分からないな。」「その道は、大きな森を通っていて、その森には人食いたちが住んでいます。でも、もうこれ以上は言えません」と、お姫さまは答えました。そののち、太鼓たたきの耳には、ヒューッとお姫さまが飛びさって行く音が聞こえてきました。

夜明けとともに、太鼓たたきは出かけました。太鼓を肩にかけ、こわいものなしで、まっすぐ森の中へと入って行きました。しばらく歩いても、大男の姿は見えませんでしたので、太鼓たたきは、「ネボ助どもをたたき起こしてやらなくちゃな」と考えました。太鼓たたきは、太鼓を前にまわして、ドンドーン、ドンドーンと連打しましたので、鳥たちは、木

木の間からかん高い鳴き声をあげて、飛びたちました。まもなく、草の中に横になって寝ていた一人の大男も起きあがりましたが、その男の高さは、モミの木ほどもありました。「このチビ助め」と、大男は太鼓たたきに向かってどなりつけました、「なんでここで太鼓なんかたたいて、気持ち良く寝ていたおれさまを起こすんだよー。」「おいらが太鼓をたたくのはな」と、若者は答えました、「おいらのあとから何千人もの仲間がやってくるから、そいつらに道を教えるためさ。」「そいつら、このおれさまの森でなにをするってんだよー」と、大男はたずねました。「おまえを片づけてな、この森からおまえみてえな怪物を追いはらうのさ。」「へえー、よく言うぜ」と、大男は言いました、「きさまらなんか、アリのようにふみつぶしてやるさ。」「おまえな、やつらに歯向かえるとでも思ってるのか」と、太鼓たたきは言いました。「一人でもつかまえようとして、おまえがかがめば、そいつは飛びのいて、かくれてしまうのさ。だがな、おまえが横になって寝ようものなら、あいつらはヤブというヤブから出てきて、おまえの上にはいあがるぞ。あいつら、一人ひとりが鉄のハンマーをベルトに差していて、おまえの脳天をぶち割るぜ。」大男は、わずらわしくなってきたので、こう考えました、「悪ぢえの働くやつらにかかわると、こっちの損になりかねんな。オオカミやクマなら、のどをしめつぶしてやるが、地虫だと身を守ることもできん。」「なあ、チビ助」と、大男は言いました、「ひっけえしてくれよ。おらーな、おめーとおめーの仲間にあー、この先なんにもしねーって約束するからよ。おめーになんか頼みがあるんなら、おらーかなえてやるぜ。」「おまえの足は長いね」と太鼓たたきは言いました、「おまえは、おいらより速く走れるな。そんなら、おいらをガラスの山へ運んでくれよ。そうすりゃ、仲間たちに退却の合図を送って、こんどはおまえのじゃまをしないさ。」「こっちへこい、おチビちゃん」と、大男は言いました、「おらーの肩に乗りな。おめーの行きたいところへ運んでやるぜ。」大男が太鼓たたきを肩に乗せると、太鼓たたきは、肩の上で、思うぞんぶん太鼓をたたきました。大男は、「これが、仲間たちへの退却の合図なんだろな」と考えました。しばらく行くと、道ばたに二番目の大男が立っていて、最初の大男か

ら太鼓たたきを受け取ると、太鼓たたきをボタン穴へ差しこみました。太鼓たたきは、ドンブリほどもあるボタンをつかんで、それにしがみつきながら、あたりを眺めて大いに楽しみました。それから二人は、三番目の大男のところへやってきましたが、この大男は、太鼓たたきをボタン穴から取りだすと、自分の帽子のへりに置きました。そこで太鼓たたきは、帽子の上をあちこち歩きまわり、木木のこずえを見わたしました。すると、青くかすんだ遠くの方に一つの山が見えましたので、太鼓たたきは、「あれが、きっとガラスの山だろ」と思いましたが、じっさいその通りなのでした。大男がもう二、三歩進むと、もう山のふもとに着いてしまいましたが、そこで大男は、太鼓たたきをおろしてしまいました。太鼓たたきは、ガラスの山のてっぺんまで運んでくれ、と頼みましたが、大男は、頭をふり、なにか分からないことをブツクサ言って、森の中へと帰って行きました。

さて、かわいそうに、太鼓たたきは、山の前に立っていましたが、この山はとても高くて、まるで山が三つも折りかさなっているようでした。おまけに、山は鏡のようにツルツルでしたから、どうやって登ったら良いのやら、太鼓たたきにはてんで分かりませんでした。若者は、登りはじめましたが、むだな骨折りで、なんどためしてても、すべり落ちるばかりでした。「こんなとき、鳥だったらなあ」と、太鼓たたきは考えましたが、そんな願いごとも役にはたたず、翼は生えてきませんでした。太鼓たたきが、そこに立ったまま、どうして良いのやら分からないでいると、そこから遠くないところで、二人の男が大げんかをしているのが目にとまりました。太鼓たたきが二人の方へ歩いて行くと、二人の目の前の地面に一つの鞍があって、二人ともその鞍を自分のものにしようとしたのが、仲たがいのもとでした。「とんでもないおろか者だな」と、太鼓たたきは言いました、「乗る馬もいないのに、鞍の取りあいでけんかするなんて。」「この鞍にはな、けんかするだけの値打ちがあるんだよ」と、一方の男が答えました、「それに乗って、どっかに行きたいと願をかけりゃ、たとえ世界のはてだろうが、行き先を言ったとたんに、たちまち着いてしまうのさ。この鞍は、おれたち二人の

ものなんだが、おれがそれに乗る番だっていうのに、あいつが承知しないんだよ。」「そのけんかに、おいらが決着をつけてやるよ」と、太鼓たたきは言って、すこしはなれたところへ行って、白い棒を地面に立てました。そうして、もどってくると、太鼓たたきは言いました、「さあ、ゴールめざして走れ。先に着いた方が、先に乗る番だよ。」二人は、かけだしましたが、二、三歩走るか走らないうちに、太鼓たたきは、鞍に飛び乗って、ガラスの山に行きたいと願をかけました。すると、手のひらを返すまもなく、太鼓たたきは、そこに着いておりました。山の上には平地があり、そこには古い石造りの家が一軒建っていて、その家の前には大きな養魚池があり、そのうしろには真っ暗な森がありました。人の姿も動物の姿も見えず、あたりは静まりかえっていて、ただ風だけが木木の間をザワザワとふきぬけ、雲が太鼓たたきの頭の上を流れて行きました。太鼓たたきは、戸口に近よって、戸をたたきました。若者が三度目に戸をたたいたとき、顔色が浅黒く、赤い目をしたばあさんが戸を開けました。ばあさんは、長い鼻の上にメガネをかけておりましたが、太鼓たたきをきつく見つめると、なんの用かえー、とたずねました。「中に入れて、食べものをくれて、泊めてよ」と、太鼓たたきは答えました。「そうしてあげるがのう」と、ばあさんは言いました、「そのかわり、仕事を三つしてくれるじゃろうな。」「もちろんさ」と、太鼓たたきは答えました、「どんなにむずかしい仕事だって、いやがりゃしないよ。」ばあさんは、太鼓たたきを中に入れてやり、食べものをあたえ、晩には上等なベッドをあてがいました。あくる朝、太鼓たたきが目をさますと、ばあさんは、自分のガリガリにやせた指から指ぬきをはずして、若者に手わたして言いました、「さあ、仕事にかかるのじゃ。外の池の水をこの指ぬきでくみだすのじゃ。じゃがの、晩になる前に片づけなきゃならんぞえー。水の中にいる魚をぜーんぶ、種類ごとに分けて、大きさの順番にならべるんじゃよ。」「こりゃ、けったいな仕事だな」と、太鼓たたきは言いましたが、それでも、池に行って、水をくみはじめました。太鼓たたきは、朝から昼までズーッと水をくみつづけましたが、大きな池の水を指ぬき一つでくみだすのでは、千年くみだしたところで、なんにもなりません。昼

になると、太鼓たたきは、「みーんなむだな話さ。働いても働かなくても、おんなじこった」と考え、仕事をやめて、その場に座りこんでしまいました。すると、一人の娘が家から出てきて、太鼓たたきの前に食べものの入ったかごを置くと娘は、「とても悲しそうね。どうかしたの、あなた」と言いました。太鼓たたきが、そちらへ目を向けると、それがすばらしく美しい娘だということに気づきました。「やだね」と、太鼓たたきは言いました、「初めの仕事すらやりとげられないんだから。あとの仕事だって、どうなることやら。ここに住んでるっていうお姫さまをさがしに出かけてきたんだけれど、見つけられなかったのさ。もう先へ行くつもりだよ。」「ここにいなさいな」と、娘は言いました、「わたしがあなたを窮地から助けだしてあげるわ。あなた、疲れていらっしゃるのよ。わたしのひざに頭をのせて、眠りなさいな。目をさましたら、仕事はすんでいることよ。」太鼓たたきは、二つ返事で言われたとおりにしました。太鼓たたきがまぶたを閉じると、娘は、すぐさま願かけ指輪をまわして、「水は上へ、魚は外へ」と言いました。すると、たちまち水は、白い霧となって上へ昇り、ほかの雲とともに流れさり、魚は、ピチパチャ飛びはね、岸へと飛びあがり、魚という魚が種類ごと大きさの順番にずらりとならびました。太鼓たたきが目をさますと、なにからなにまで全部片づいているのを見て、びっくりしてしまいました。ところが娘は、「魚の一匹は、仲間たちのところではなく、ポツーンとはなれたところにあるわ。ばあさんが今晩やってきて、頼んでいたことがみんな片づいているのを見たら、『ここにいるこの一匹の魚は、どうしたんじゃな』とたずねるわよ。そしたら、その魚をばあさんの顔めがけて投げつけ、『そいつあ、てめえのために取っておいてやったのさ、このくそばばあめ』と、おっしゃるのよ」と言いました。夕方ばあさんがやってきて、そうたずねたとき、太鼓たたきは、ばあさんの顔めがけて魚を投げつけました。あくる朝、ばあさんは、「きのうの仕事は、かんたんすぎたようじゃな。おまえには、もっとむずかしい仕事をやってもらうわい。今日おまえは、森の木をぜーんぶ切りたおして、その木をたきぎに割り、そのたきぎをつんで棚にするのじゃ。夕方までにはぜーんぶ片づけるのじゃよ。」ばあ

さんは、太鼓たたきにオノとツチとクサビを二本わたしました。ところが、オノは鉛で、ツチとクサビはブリキでできていました。太鼓たたきが木を切りはじめると、オノは曲がり、ツチとクサビはペチャンコにつぶれてしまいました。太鼓たたきは、途方にくれてしまいましたが、昼になると、また娘が食べものをもってきて、太鼓たたきをなぐさめてくれました。「わたしのひざへ頭をのせなさいな」と、娘は言いました、「そして、眠りなさいな。目をさましたら、仕事はすんでいることよ。」娘は、願かけ指輪をまわしました。そのとたんに、森中の木木がメリメリと音を立ててたおれ、木はひとりでに割れてたきぎになり、たきぎの棚となってつみあがりました。それは、まるで目に見えない大男たちが仕事をやってのけたかのようでした。太鼓たたきが目をさますと、娘は、「さあ、ごらんなさいな。たきぎは、棚の形でならんでるでしょ。枝が一本だけ残っているけど、ばあさんが今晩やってきて、あの枝はどうしたんじゃ、とたずねたら、その枝でばあさんをなぐって、『ありゃあ、てめえのために取っておいてやったのさ、くそばばあめ』と、おっしゃるのよ」と言いました。ばあさんがやってくると、「ほれ、ごらん」と言いました、「なんでもない仕事じゃったろよ。じゃが、あそこにあるあの枝は、だれのもんじゃろな。」「てめえのもんだよ、くそばばあめ」と、太鼓たたきは答えて、その枝でばあさんをなぐりました。ところが、ばあさんは、まるで痛みを感じないとでもいうように、あざ笑いながら、「あしたはな、たきぎをぜーんぶ一山にまとめてな、それに火をつけて、燃やすんじゃよ」と言いました。夜明けとともに起きて、太鼓たたきは、たきぎを集めはじめました。けれども、たった一人の人間が、どうすれば森中のたきぎを集められるというのでしょうか。仕事は、ちっともはかどりません。にもかかわらず、娘は、窮地にある太鼓たたきを見捨てず、昼になると、食べものをもってきましたので、食べ終わると、太鼓たたきは、頭を娘のひざにのせて、眠りこみました。太鼓たたきが目をさますと、たきぎが全部、ものすごく大きな炎をあげて燃えていて、その炎の先は、天までのびていました。「わたしの言うことをよく聞いてちょうだいな」と、娘は言いました、「魔女がやってくるたびに、いろんなことを言いつけ

るでしょうけれど、こわがらずに、なんでも言いつけどおりにしてちょうだい。そうすれば、魔女は、あなたになにもできやしません。でも、あなたがこわがったりすれば、火があなたをつかまえて、のみこんでしまいますよ。あなたがみんななし終えたら、しまいには魔女を両手でつかまえて、火のど真ん中へほうりこんでちょうだいな。」こう言って、娘が立ちさると、ばあさんが足音をしのばせてやってきました。「ヒェー、寒い」と、ばあさんが言いました、「じゃが、火が燃えとるのう。こりゃあ、わしの年とった骨をあっためてくれて、気持ちが良いわい。じゃが、あそこにちっとも燃えるけはいもない丸太ん棒が一つころがっとるのう。あれを取りだしてくれんかのう。取りだしてくれたら、おまえさんは自由じゃよ。どこへなり、好きなところへ行くがよいさ。さあ、元気よく、火の中へ入るのじゃよ。」太鼓たたきは、長いことためらわずに炎の真ん中へ飛びこみましたが、それでも、なんの被害もなく、髪の毛がこげることすらありませんでした。太鼓たたきは、その丸太ん棒を火の中から取りだして、地べたへ置きました。ところが、その丸太ん棒が地面にふれたとたんに、それは形を変えて、美しい娘が太鼓たたきの目の前に立っておりました。それは、窮地にあった太鼓たたきを助けてくれたあの娘でした。娘が着ている、黄金色に輝く絹の衣装を見て、太鼓たたきは、それがめざすお姫さまだということがよく分かりました。けれども、ばあさんは、毒毒しく笑って、「娘を手に入れたと思ってものう、そうはいかんのじゃよ」と言いました。ばあさんが娘にかけよって、つれさろうとしたちょうどそのとき、太鼓たたきは、ばあさんを両手でつかんで、高くもちあげると、大きな口を開けて燃えている炎の中へと投げこみました。炎は、ばあさんをのみこむと、口を閉じましたが、それは、まるで魔女を食べるのを喜んでいるかのようでした。

そのあとでお姫さまは、太鼓たたきをジーッと見つめました。それがりっぱな若者であることが分かり、自分を救うために、その命をかけてくれたことが思いやられましたので、お姫さまは、太鼓たたきの方へ手を差しのべて、「あなたは、わたしのためにどんな危険をおかすこともいといませんでした。ですから、わたくしも、あなたのためにどんなことでも

いたします。あなたが夫婦のちぎりを約束してくださるなら、あなたを夫にいたしましょう。わたしたちは、財宝には不自由いたしません。あの魔女が集めておいた宝がここにはたくさんございますから。」お姫さまが太鼓たたきを家の中へ案内すると、そこには宝物がたくさんつまった大箱小箱がありました。二人は、金と銀はそのままにしておいて、宝石だけを取りだしました。お姫さまが、もうそれ以上ガラスの山にはいたくないと言い張りましたので、太鼓たたきは、「いっしょにわたしの鞍に乗ってください。鳥のように舞いおりましょう」と言いました。「古ぼけた鞍はごめんです」と、お姫さまは言いました、「わたしが願をかけ指輪をまわしさえすれば、わたしたちは家に着くのですからね。」「いいですとも」と、太鼓たたきは答えました、「市門の前に着くように願かけてください。」アッと言うまに、二人はそこに着きましたが、そこで太鼓たたきは、「まず両親のところへ行って、お姫さまの到着を知らせてきましょう。この野原で待っていてください。じきにもどってきますから」と言いました。「どうしましょう」と、お姫さまは言いました、「お願いですから、気をつけてちょうだいな。家に着いたら、ご両親の右の頬にキスをしないでね。キスをしようものなら、あなたは一切合切忘れてしまって、わたしはここで独りぼっちになって、野原にとり残されてしまうでしょうから。」「なんであなたを忘れましょうか」と、太鼓たたきは言い、お姫さまの手をにぎって、ほんとうにすぐもどってくると、かたく約束しました。太鼓たたきが父親の家に入って行くと、それがだれなのか、だれにも見分けがつきませんでした。それほどまでに、太鼓たたきの様子が変わってしまっていたのです。というのも、太鼓たたきがガラスの山ですごした三日間は、じっさいには三年という長い年月だったからです。そこで太鼓たたきは、自分の素性を明らかにしました。すると、両親が喜びのあまり、太鼓たたきの首に抱きつきましたので、太鼓たたきは、ひどく感動すると、お姫さまのことばを忘れて、両親の左右の頬にキスしてしまいました。太鼓たたきが両親の右の頬にキスしたとたん、お姫さまのことなどすっかり頭から消えさってしまいました。太鼓たたきは、すごく大きな宝石をつかんで、ポケットから出し、ポケットがからに

なるまで、宝石をテーブルの上に置きました。両親は、その宝石をどうしたら良いのやら、まるで分かりませんでした。そこで父親は、豪勢なお城を建てましたが、それは、いくつもの庭園や森や草地に取りかこまれていて、まるで領主でも住んでいるようなお城でした。お城ができあがると、母親は、「おまえのために娘をさがしておいたから、三日たったら結婚式をあげましょ」と言いました。太鼓たたきは、両親の言うことには、なんでも賛成でした。

お姫さまは、かわいそうに、長いこと市外に立って、若者の帰りを待っておりました。日が暮れると、お姫さまは、「きっと、あの人は、ご両親の右の頬にキスをして、わたしのことを忘れたんだわ」と言いました。お姫さまの胸は、悲しみでいっぱいになりましたので、願をかけて、さびしい森の小屋へとひき移り、二度と父親の宮廷にもどるつもりはありませんでした。お姫さまは、毎晩市内へ行って、太鼓たたきの家のそばを通りすぎました。太鼓たたきは、何度もお姫さまを見ましたが、もう見分けがつかなくなっていました。しまいにお姫さまは、人びとが「あすは太鼓たたきの結婚式だってな」と言っているのを耳にしました。そこでお姫さまは、「あの人の心を取りもどせるかどうか、やってみましょう」と言いました。結婚式の第一日目が祝われるとき、お姫さまは、願かけ指輪をまわして、「お日さまのように輝く衣装を」と言いました。たちまちお姫さまの目の前に衣裳が出てきましたが、それは、まるで日の光だけで織られてでもいるかのように輝いておりました。お客方が全員集ってから、お姫さまは、広間の中へと入りました。いあわせた人人はみんな、その美しい衣裳におどろきましたが、中でも一番おどろいたのが花嫁でした。この花嫁は、美しい衣裳を見ると、たまらなくほしがる人でしたから、その見知らない女性のところへ行って、それを自分に売ってくれませんか、とたずねました。「お金では売りません」と、お姫さまは答えました、「でも、もし最初の夜に、花婿が眠る部屋の戸の前にズーッといてよろしいと言うのでしたら、これを差しあげます。」花嫁は、その衣装をあきらめきれませんでしたので、この願いを聞き入れました。けれども花嫁は、花婿の寝酒の中に眠り薬をまぜておきましたので、花婿は、ぐっすり眠りこん

でしまいました。さて、あたりがすっかり静まりかえると、お姫さまは、寝室の戸の前にうずくまり、ちょっと戸を開けて、中へ声をかけました。

「太鼓たたき、太鼓たたきさん、わたしの言うことよく聞いてよ、
わたしのことなど、すっかり忘れてしまったの？
ガラスの山で、わたしのそばに座っていたじゃないの。
魔女からあなたを守ってあげたじゃないの。
夫婦のちぎりを、わたしにかたく誓ったじゃないの。
太鼓たたき、太鼓たたきさん、わたしの言うことよく聞いてよ。」

けれども、それもまったくのむだで、太鼓たたきは、目をさまさず、そうして夜が明けると、お姫さまは、目的をはたさないまま、その場から立ちさらなければなりませんでした。二日目の晩にお姫さまは、願かけ指輪をまわして、「お月さまのように銀色に光る衣裳を」と言いました。お姫さまがお月さまのようにやさしく光る衣装を着て宴会場に」あらわれると、花嫁は、またその衣裳がほしくてたまらなくなりました。第二日目の晩も、寝室の前にいてもよいという許しをいただいて、お姫さまは、その衣裳を花嫁にあげました。そこでお姫さまは、夜のしじまの中で、声をかけました。

「太鼓たたき、太鼓たたきさん、わたしの言うことよく聞いてよ、
わたしのことなど、すっかり忘れてしまったの？

ガラスの山で、わたしのそばに座っていたじゃないの。
魔女からあなたを守ってあげたじゃないの。
夫婦のちぎりを、わたしにかたく誓ったじゃないの。
太鼓たたき、太鼓たたきさん、わたしの言うことよく聞いてよ。」

けれども、太鼓たたきは、眠り薬でマヒさせられて、目をさますことはかないませんでした。朝になると、お姫さまは、悲しげに、また森の小屋へともどりました。ところが、屋敷に住む者たちが見知らぬ娘の嘆きを耳にし、花婿にそのことを話しました。その者たちはまた、花嫁がワインに眠り薬をまぜておりましたから、娘の嘆きを聞きとるなんて、あなたさまにはご無理でございました、とつけくわえました。三日目の晩に、お姫さまは、願かけ指輪をまわして、「星のようにきらめく衣装を」と言いました。お姫さまがその衣裳をに身をつつんで宴会場にあらわれると、花嫁は、それまでの衣裳をはるかにうわまわる衣裳の豪華さに、すっかり心をうばわれて、「なんとしても、あの衣裳を手に入れなくちゃ」と言いました。娘は、前の衣装のときと同じように、その夜も花婿の寝室の戸の前にいてよいという許しをもらって、花嫁にその衣裳を差しあげました。ところが、花婿は、寝る前に手わたされたワインを飲まないで、ベッドのうしろにすててしまいました。やがて、屋敷の中が寝静まると、花婿は、自分に呼びかけるやさしい声を耳にしました。

「太鼓たたき、太鼓たたきさん、わたしの言うことよく聞いてよ、
わたしのことなど、すっかり忘れてしまったの？
ガラスの山で、わたしのそばに座っていたじゃないの。

魔女からあなたを守ってあげたじゃないの。
夫婦のちぎりを、わたしにかたく誓ったじゃないの。
太鼓たたき、太鼓たたきさん、わたしの言うことよく聞いてよ。

すると、にわかに太鼓たたきは、記憶を取りもどしました。「なんということだ」と、太鼓たたきは叫びました、「よくもこんな裏切り行為ができたものだな。喜びのあまり、両親の右の頬にキスしたせいで、正気を失ってしまったんだな。」太鼓たたきは、飛び起きると、お姫さまの手を取って、両親のベッドのところへつれて行きました。「これが、わたしのほんとうの花嫁です」と、太鼓たたきは言いました、「もし、ほかの女性と結婚しようものなら、とんでもない過ちをおかすところでした。」両親は、これまで起こったことの一切合切を聞くと、太鼓たたきの言うことを受け入れました。そこで、またもや広間にローソクがともされ、太鼓とラッパが運びこまれ、友だちや親せきの人人がもう一度招待されて、ほんとうの結婚式がたいへんおめでたく祝われました。初めの花嫁は、結婚しなかったその埋めあわせとして、三着の美しい衣裳をもらい、それで満足しました。

『水晶玉』（ＫＨＭ一九七）

むかしむかし、あるところに一人の魔法使いの女がいて、この魔女には三人の息子がありました。この息子たちは、兄弟仲良く暮らしておりました。ところが、老いた母親は、息子たちを信用せず、息子たちは、自分の権力をうばおうとしているのだ、と考えておりました。そこで、母親は、長男をワシに変えましたので、ワシは、岩の山山の上で暮ら

さなければなりませんでした。こうして、ワシが、たびたび大空に大きな輪をえがいて、上へ下へと飛ぶ姿が見られました。母親は、次男をクジラに変えましたので、クジラは、深い海の中で暮らしました。こうして、クジラは、ときどき巨大な水柱を吹きあげるときだけ、その姿が見られました。二人の兄弟は、毎日二時間だけしか人間の姿でいることができませんでした。三男坊は、母親が自分をも、クマかオオカミといった猛獣に変えるのをおそれ、こっそり逃げだしてしまいました。ところで、黄金の太陽のお城には、魔法をかけられたお姫さまがいて、救いだされるのを待ちこがれているというお話を聞いておりました。そして、それによりますと、お姫さまを救いだすという者は、命をかけなければならず、すでに二十三人の若者が無残な死をとげ、わずかに残っているのは一人だけで、それが失敗すれば、もはやだれもお城に近づくことは許されないということでした。なんといっても、三男坊は、こわいものなしでありましたので、黄金の太陽のお城を探しだす決心をしました。三男坊は、もう長いこと、あちこち歩き回りましたが、そのお城を見つけだすことはできませんでした。そうしているうちに、とある大きな森の中にさまよいこんで、出口がどこになるのかも分からなくなってしまいました。そのときふと、三男坊は、遠くのほうで、二人の大男が手まねきをして、自分を呼んでいるのに気づきました。三男坊が大男たちのところにやってきますと、二人は言いました。「おれたちゃあ、この帽子がどっちのものかでけんかしているんだがなあ、二人とも同じくれえーつえーもんだでなあ、どっちも相手を倒せねえってわけなんだ。ちいちぇー人間どもは、おれたちよりあたまあいいだでなあ、おめえにそれを決めてもらおうって思うんだよ。」「いったい、あんたたちは、どうして古ぼけた帽子一つぐらいでけんかするのかなあ」と、若者は言いました。「おめえなあ、この帽子がどんなものか知らんだろがなあ、こいつあ魔法の帽子だでなあ、こいつをかぶるものあな、どこへ行くのも、お望みしだいなんだ。あっと言うまに、行きたいところに着いているというわけだよ。」「その帽子を、おいらに貸してみてよ」と、若者は言いました。「おいらが、ちょっと行ってみて、そこであんたたちを呼んだらね、二人でかけっ

こして、おいらのところに先に着いたほうが、その帽子をもらうのさ」と言って、その帽子をかぶって歩きだしました。ところが、お姫さまのことを考えていたものですから、大男たちのことは忘れて、どんどん先へと進んで行きました。ふと、若者は、心底ため息をついて、こう叫んでしまいました。「ああ、黄金の太陽のお城に行けたらなあ！」すると、その言葉が口にでるかでないうちに、若者は、お城の門の前にある高い山の上に立っていました。

若者は、中に入り、部屋という部屋を残らず通りぬけますと、一番奥の部屋にお姫さまを見つけました。ところが、その姿を見たとき、どんなに若者はおどろいたことでしょう。お姫さまの顔は灰のように白茶け、しわだらけで、目はドロンとし、髪は赤毛だったのです。「あなたが、あのお姫さまですか。世の中の人人が、美しいと言ってほめたたえているのに」と、若者は大声で叫びました。「ああ」と、お姫さまは言いました。「これは、あたしの姿ではありません。人の目には、醜い姿のあたししか見えないのです。でも、あたしの姿を知りたいのなら、その鏡をのぞいてごらんなさい。鏡は、まどわされずに、あなたにあたしの本当の姿を見せてくれるでしょう。」お姫さまは、若者に鏡を手わたすと、その中には、この世にまたとない美しい乙女の姿がうつっていて、悲しみのあまり、大つぶの涙がそのほおをつたっておりました。そこで、若者は言いました。「どうしたら、お姫さまは救われるのでしょうか。ぼくは、危険などおそれません。」お姫さまは、言いました。「水晶玉を手に入れて、それを魔法使いの目の前にさしだせば、それで魔法の力はやぶられて、あたしは本当の姿にもどれるのです。ああ」と、お姫さまは言って、こうつけくわえました。「すでに、もうたくさんの人たちが、それで命を落としましたから、もし、あなたのようなお若いかたが、すすんで大きな危険をおかそうとなさるのであれば、あたし気の毒でなりません。」「ぼくをじゃまだてできるものは、なにもありません」と、若者は言いました。「どうぞ、ぼくのしなければならないことを言ってください。」「全部話してあげましょう」と、お姫さまは言いました。「このお城のある山をくだりますと、ふもとの泉のそばに一匹のオスの野牛がいるでしょう。あなたは、この野牛と戦

わねばなりません。もし、しゅび良くこの野牛を殺せると、そのお腹から一羽の火の鳥が飛びたつでしょう。この火の鳥は、そのお腹に燃えさかる卵を一つもっていて、その黄身は水晶でできているのです。けれど、火の鳥は、落とすようせっつかれなければ、その卵を落とさないのです。でも、卵が地面に落ちますと、発火して、そのまわりにあるものをすべて燃やしてしまい、やがて、卵そのものもとけて、それといっしょに水晶玉もとけてしまいますから、あなたの苦労は、みんな水のあわになってしまうでしょう。」

若者は、山をくだって、泉のところへ行きました。そこにはオスの野牛がいて、あらい鼻息をたてて、若者にほえかかりました。長いこと戦って若者は、剣を野牛のお腹につき刺しましたので、野牛はくずれ落ちてしまいました。そのしゅんかん、野牛のお腹から火の鳥が飛びたち、飛びさろうとしました。ところが、若者のお兄さんのワシが、雲の間からやってきて、火の鳥めがけて急降下し、火の鳥を海へとかりたて、そのくちばしでつきを入れましたので、火の鳥は、その苦しみのあまり、卵を落としてしまいました。ところが、卵は、海の中へではなく、海辺にあった漁師たちの小屋へ落ちてしまいましたので、小屋は、たちまち煙を吹きはじめて、ボーボーと燃えあがらんばかりでした。そのとき、海で家のように高い波がもりあがって、小屋の上へとおしよせると、その火を消してしまいました。もう一人のお兄さんのクジラが、泳いでやってきて、海水を高くもちあげたのでした。火事もおさまって、若者が卵を探してみますと、幸い卵は見つかりました。卵は、まだとけておりませんでした。ところが、その殻は、冷たい水で急に冷やされたものですから、ボロボロになってしまっておりましたが、若者は、水晶玉を無キズで取りだすことができました。

若者が魔法使いのところに行って、水晶玉をその目の前にさしだすと、魔法使いは言いました。「わしの魔力は、やぶられてしまったから、おまえがこれから黄金の太陽のお城の王さまじゃよ。おまえの兄さんたちにも、おまえは、水晶玉で人間の姿を取りもどしてやることができるじゃろ。」すると、若者は、お姫さまのところへと急ぎました。若者がお姫

さまのお部屋に入ると、そこには全身美しさに光り輝くお姫さまが立っておりました。こうして、二人は、大喜びで結婚指輪を取りかわしました。

注

この翻訳の底本は、〈Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980.〉である。

訳者は、『グリム童話翻訳の歴史的外観 ― 著者による童話八編の新訳と共に ―』と題して、平成一二（二〇〇〇）年二月に、すでにグリム童話八編の新訳を呈示した。その後、『新訳グリム童話四編 ― KHM九、一一、一二、一五 ―』と題して、平成一六（二〇〇四）年一月にグリム童話四編の新訳を、『新訳グリム童話五編 ― KHM一九、二五、二八、三四、五二 ―』と題して、平成一八（二〇〇六）年二月にグリム童話五編の新訳を、『新訳グリム童話三編 ― KHM五五、六五、一九一 ―』と題して、平成一八（二〇〇六）年七月にグリム童話三編の新訳を、呈示した。その翻訳方針は、前回と同様で、「適宜ルビをふった」。

今回で新訳の試みは五回目であるが、これをもって「グリム童話新訳の試み」は、一応終了となる。この機会に、「ユングの元型理論」に関するメモをここに記載しておく。

ユングの元型理論

オイディプス・コンプレックスやエレクトラ・コンプレックス、アニマ、アニムスといった心理学用語は、今日一般化している。これらの用語は、主にジークムント・フロイト（Sigmund Freud, 1856-1939）の精神分析学とユング（Carl Gustav Jung, 1875-1961）の深層心理学から出てきている。

古代ギリシアでは、プラトンが著した『パイドン』の中で、かの有名なソクラテスが死に臨んで、魂の実在とその不死を弟子たちに論証してみせている。

しかしながら、魂の実在とその不死という考えは、その後徐々に廃れ、自然科学的唯物論が登場する一九世紀後半に入ると、その思想はほとんど停滞する。この状態は、恐らく形而上学的神学が中世及び中世以降において絶大な権力を揮ったその反動によってもたらされたものであろう。

一七世紀後半から一八世紀前半にかけて、ドイツの偉大な哲学者であるライプニッツ（Gottfried Wilhelm Freiherr von Leibniz, 1646-1716）は無意識の心を仮定し、一八世紀後半においてカント（Immanuel Kant, 1724-1804）が「暗い諸々の表象の測りがたい分野」について論じ、さらに、一九世紀前半においてカールス（Carl Gustav Carus, 1789-1869）が無意識という概念を提出している。

この後に学問として確立された心理学は、主として実験に基づく実証主義的心理学であった。実証主義的ないしは唯物論的思潮の中にあって、無意識の存在に照明を当て、その病の治療を通じて、臨床医学的立場からリビドーに基づく精神分析を体系化したのがフロイトであった。

この後、ユングが登場し、フロイトと共に精神分析の発展に貢献したのであるが、しかし、やがて無意識に関する根本的理解が異なっていたために、二人の仲は決裂する羽目となってしまう。フロイトは無意識を「リビドー（性的衝動）」として、しかも、人間の力では制御できない抑圧された領域として捉えるのに反して、ユングは無意識を「集合的無意識」ないしは「心的エネルギー」として、かつその方法を知れば十分に制御可能な領域として捉えるのである。

フロイトの精神分析によると、人間の人格は口唇期・肛門期・男根期という過程を経て発達すると言われる。加えて、有名な『夢の精神分析』の中でも、夢の解釈に用いられる諸々の概念には常に性的なイメージがつきまとっている。とはいっても、ドイツの言語学者であるハンス・エガースの統計によると、『ローヴォルト・ドイツ百科事典』において最も頻繁に言及される人名は、第一にソクラテスで

あり、続いてフロイトであるという結果が出ている。

ユングの提唱する元型理論の立場に立って考えると、心的エネルギーはある程度制御可能なものとなる。そこで提出されている元型は、主としてシャドウ、ペルソナ、アニマ、アニムス、グレート・マザー、老賢人の六つである。

この無意識のエネルギーを制御する方法を知らない人は、羅針盤をもたずに荒れ狂う海へと長い航海の旅に出る無謀な船乗りにも例えられる。

(1) **シャドウ**：これは、読んで字のごとく、影のことである。人間は通常、自分の自我を意志や欲望、あるいは遺伝形質や環境に従って発展させるが、しかし、本来人間は大きな可能性に富む自己形成力をもつと考えられる。狼の群れの中で育つと、狼にもなりうる潜在的可能性をもっている。この自我は、意識によって形成された自我、すなわち自我の光に当たった部分と言える。また、光に当たった部分は、当然のことながら影を投げかける。これが、自我の影の部分である。人は誰でも、心の奥底にこの影の自我をもっている。大抵の人々は、この影の自我に気づいていないのであるが、人によってはこの影が力を揮って、その人を破滅させる場合も起こりうる。例えば、ジーキル博士とハイド氏は、その典型的な例である。そこまでゆかなくとも、豹変したり、怒って逆上するとなにをするか分からないといった人々は、おおよそこの影の自我に気づいていない人々である。ことあるごとに内省し、この影の自我と対話する人は、より完全な自己を発見することができる。

(2) **ペルソナ**：人格のことであるが、平たく言うと、仮面のことである。人間誰しも体験することであるが、人間は自分を良く見せようとして外向きの顔をつくるものである。つまり、これは「恥の文化」をもつ日本人において典型的に現れてるように、恥をかきたくない、自分の恥ずかしいところを他人に見られたくないという願望からくるものである。この仮面の下に実際の、大抵は不完全で弱い自分が隠されている訳であるが、人は中々この実際の自分を見せたがらない。ここにおける危険は、仮面と実際の自分とを混同してしまうことである。役者は、たとえ気に入った役柄を永遠に演じていたいと思っても、演技が終わればもとの自分に戻らざるをえない。それと同じよ

うに、人前で仮面を付けている人間も、一人になったら仮面をはずして、本来の自分に戻らなければならない。そして、心の緊張をほどいて、くつろがなくてはならない。

(3) **アニマとアニムス**：共に、それぞれ男性女性が無意識の中に秘めている、抑圧された未発達な異性原理を指している。つまり、極論すると、人間には百パーセント男性的な男性もいなければ、百パーセント女性的な女性もいないということになる。男性は対立する女性原理を、そして、女性は男性原理を生まれながらにしてもっているのである。それゆえ、自分の内面にある異性的な心の像に注目せねばならない。アニマの場合、そのイメージは成長するに伴って、娼婦――聖女――賢女という過程をたどり、アニムスの場合そのイメージは、父親――有能な人物――老賢人という過程をたどると言われている。人間は、無意識の中に潜んでいる異性原理に常に注意を払わざるをえないのである。しかしながら、このことがまた、互いに相手を理解することにも通じるのである。

(4) **グレート・マザー**：これは、偉大な母のイメージであって、女性にとっては究極的な目標となるが、男性にとっては克服しなければならないものである。このグレート・マザーは、次の老賢人と同様、善のイメージばかりではなく、悪のイメージももっている。例えば、過保護の母親というのはこの悪のイメージの具体例であって、これは子どもを未熟のままに留まらせることとなる。つまり、その子どもは、母親から精神的に自立できなくなって、あらゆることに関して母親の判断を仰ぐことなしには、一人でなにもできない子どもに育ってしまいかねないのである。すなわち、マザー・コンプレックスに陥りかねないのである。女性は、特にこの点に注意しなくてはならない。女性は、ただ優しければもうそれでいいというものではない。場合によっては、厳しくもあらねばならないのである。

(5) **老賢人**：これは、偉大な賢者のイメージであって、男性にとっては究極的な目標であり、女性にとっては克服しなければならないものである。この老賢人のイメージは、一般に、人間に助言や警告を発するが、ときとしてそれが厳し過ぎると、女性の場合にはいわゆるファーザー・コンプレックスに陥ってしまいかねない。そうなると、男性はすべてが恐怖の対象となって、異性関係がスムーズに進展しないといった事態も生ずる。他方、男性の場合には、それは権力打倒という反抗的態度となって現れ、オイディプス王のように、父親殺害の願望となっ

てゆく可能性もある。

（6）「集合的無意識」を代表する六つの元型においては、対立原理が支配している。つまり、光と影、男と女、善と悪、軽いと重い、高いと低い、プラスとマイナスといった対立要素間の緊張が問題となっているのである。そして、ここからすべての運動が生じてくると言っても過言ではない。もし、世の中が女性、あるいは男性だけから成っているとしたら、心的エネルギーが停滞して、そこには運動が生まれず、発展もなく、従ってまた、生産的な活動も展開されない。

（7）筆者の二〇代半ばにおける歯が砕ける夢。「それは、ちょうど好物の固い煎餅をかじっているとき、ボリッという音がして、煎餅が砕けていると思っていると、それは煎餅ではなく、実は自分の歯が砕ける音なのであった。そして、そのことに気が付くと、今度は砕けたその歯ばかりではなく、その他の歯まで、まるでそれらが砂でできているかのように、ボロボロと砕けて、口中が砂状になった歯で充たされてしまうという、後味の悪い夢であった。しかも、一回きりではなく、何度も同じような夢を見たので、筆者はその夢の意味が知りたくて、否応なくフロイトの『夢判断』や『精神分析』を必死で読んだものであった。」

その夢を「過去の失敗や未来に対する不安からくるもの」と把握し、歯が砕けることは「成長に必要な段階あるいは達成された成長を表す」と解釈できたとき、初めて安堵の胸をなで下ろすと共に、新たな自分の未来に挑戦してゆく勇気が生まれてきたのであった。